

琉球大学学術リポジトリ

『南洋情報』とその時代

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲程, 昌徳, Nakahodo, Masanori メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2384

『南洋情報』とその時代

仲 程 昌 徳

一九三九年（昭和十四年）十一月二十五日発行『南洋情報』第五卷十一号は、「満五周年記念南洋群島特別号」と銘打って発行された。そのことについて仲原善徳は「南洋群島特別号発行に就て」として、

本特別号は南洋群島を外南洋各地に紹介する趣意を以て編集したものであるが、充分意を尽し得なかつたのは遺憾の極みである。然しながら「ダバオ特別号」「マニラ特別号」「台湾、北ボルネオ、比律賓特別号」同様南洋群島のかつて現れざる半面に就て知り得る絶好の参考材料たり得るを信じて居る。

と書いていた。

仲原が、南洋を知るのに「絶好の参考材料」として上げていた「ダバオ特別号」が刊行されたのは一九三六年（昭和十一年）九月二十二日、「マニラ特別号」が同年十一月二十日、「台湾、北ボルネオ、比律賓特別号」が一九三八年（昭和十三年）十一月二十五日である。『南洋情報』は、勿論「特別号」だけを発行したわけではない。本稿では一九三六年から一九三九年にかけて発行された「特別号」だけに限って見ていくことにしたい。

『南洋情報』を取り上げるのは、他でもなく、沖縄人関係記事が豊富に見られるということによる。一九三〇年代に刊行されていた南洋関係雑誌としては『南洋』『海を越えて』『南方情勢』『南洋時代』『南洋群島』『太平洋』『南進』『大洋』『南方』といったのが上げられようが、沖縄人と関わる記事を豊富に掲載した雑誌と言うことになる。

まず『南洋情報』特別号の右に出るものはないといつていいだろう。それは、例えば次のような記事。

南洋地方の至る処に多数の沖繩県人が存在する。歴史的及び地理的關係の然らしむる処であつて、日本の南進政策はこの県人が常に先駆者となつて居り、恐らく将来も沖繩県人を重視せずにはいかなる事業も振はないであらう。

沖繩県人は氣候風土の關係から、恐らく朝鮮滿州に於てはさしたる役に立ち得ないであらうが、南方暑熱の地方に於ては理想的の県民である。然るに、此特性を知らずして、地方的反感と偏見より往々その欠点を挙げ、長所を無視して讒誣中傷するものあり、事実上に於て圧迫を加えるものすらある。これは南進日本の為めに悲しむ可きところである。

かやうな外部の偏見と、排他心に対抗し、一面多衆(オウゴ)の県人の向上を図り、国家の海外発展に資する為めに県人会は常に他府県の県人会よりも強力なる組織をなし、指導力をもつて居る。ダバオ沖繩県人会の如きはその最代表的なもので、その指導者には往々勝れたる人材が輩出する。

「南洋情報特集号ダバオ」は「事業界の人々」として、「一 太田興業会社」「二 古川拓殖会社」「三 マナンブラン拓殖会社」「四 バヤバス拓殖会社」「五 バト拓殖株式会社」「六 南ダバオ興業株式会社」「七 大江鐵工所」「八 南ミンダナオ興業株式会社」といつたダバオの邦人有力企業をあげその経営陣を紹介しているが、その中に「八 沖繩県人会」も取り上げられている。右の引用文は、その紹介記事の前半部分である。一県人会組織が、有力企業と一緒に紹介されていることの不思議さもさることながら、沖繩人の「先駆者」的役割を賞賛するとともに、沖繩人の処遇を憂える記述は、『南洋情報』に見られる豊富な沖繩関係記事の特色を遺憾なく示すものとなつていた。

「南洋情報特集号ダバオ」が、「南洋地方の至る処に多数の沖縄県人が存在する」ことを示さんとしているのは、埋め草程度の「ダバオ始め集」にもよく現れている。それは、一 ダバオに初めて足を入れた日本人、二 開墾を始めてなした会社、三 第一次の土地問題、四 初めて出来た団体、五 日本人会の始まり、六 領事館の創設、七 製水会社の始まり、八 寺院の創立、九 市民権獲得者第一番、十 味噌製造業の始まり、十一新聞の始まり、十二 ダバオ日本人小学校創立といったのが取り上げられているが、そこには沖縄県生まれの鹿児島県人である須田というものが初めてダバオを探険して、マニラの日本人に報告したこと（一）、月日は判らないが、ダバオの沖縄人会は日本人会よりも数年も早くできたこと（四）、新日本人会の初代の会長に大城孝蔵が選出されたこと（五）、一九三四年（昭和九年）には神山鴻吉の子神山鴻正が市民権を獲得し、最初の帰化邦人になったこと（九）、一九二〇年（大正九年）三月、新崎寛禪技師が、仲原善徳らと協力して大力商會を設立し、味噌製造業を始めたこと（十）、一九一八年（大正七年）最初の謄写版刷りの会報「ダバオ日本人会報」が発刊されると同時に仲原善徳らが同人雑誌を出す、数字で廃刊（十二）といった記述には、沖縄人が如何に多方面で先陣を切ったか、そのことを広く知らせたいとする思いが溢れ出ているのがよくわかるであろう。それは、「物故先覚者録」や「ダバオ先住の人々」に、沖縄県人の名前が数多く記されているのにも現れているように、とりわけ前者の大城孝蔵に関する記述にはそれがよく現れている。

比律賓に於ける本邦移民中、沖縄県人が忍耐力強く質素にして勤勉の風あつて常に成績の良好なるはベンゲツト以来一般の認むるところで、大城孝蔵は沖縄移民の引率者として常に太田商店時代より大なる努力を払ひ、太田恭三郎は又大城なくしては全然事業の完成は不可能とまで云はしめた程で、今日の太田興業はこの人に負ふ処極めて大である。（中略）

ダバオに於ける大城孝蔵の功績は太田恭三郎と共に並び称されて居り、大正七年ダバオ日本人会の組織せらるるや初代の会長に推挙され、又同郷の沖繩県人会組織せられるやこれ又推されて会長となつてゐた。内外人に信望極めて深く、国士的風格を備へ、常に比律賓の爲め、日本の爲めと日比の共存共栄を志し、言行一致、又極めて俠気に富み、大正六七年邦人会社の多く設立された時は、進んでその助長庇護に努めた。太田興業会社をして今日あらしめ、ダバオをして今日あらしめたのは此人の功績与つて力がある。真にダバオ移民の父としての大城孝蔵は、比律賓人よりは太田会社当初の開拓地たるバゴバゴがバゴ大城と呼ばれて居る程親まれ、日本人同胞よりは吾等の大城と呼ばれ、沖繩の同郷人よりは吾等のおやぢ(父)と尊敬されてゐた。

「太田はダバオをつくり、ダバオは太田を培養した。兎に角、太田は即ちダバオであり、ダバオは太田であつた」といわれた。「太田」と並び称される大城、そして「太田興業会社をして今日あらしめ、ダバオをして今日あらしめた」大城といった賞賛の言辞には、沖繩県人が「忍耐力強く質素にして勤勉の風あつて常に成績の良好なる」民であるばかりか、常に先陣に立つて働いてゐることを知つて欲しいという思いが込められていたはずである。

ダバオには、多くの沖繩人がいた。それは、いち早く「沖繩県人会」が組織されたことから明らかであるが、沖繩人の動向をよく伝えるものに紀行文がある。「ダバオ特集号」には七本の紀行文が寄せられていた。それぞれに沖繩人と関わる記述が見られるが、その中でも石垣桑治の紀行文は、沖繩人のいるところならどこまでも訪ねていくといった格好のものとなつてゐる。

一 キンキン、ボンボンに行つて見ませんか。と、仲間君が云つた。キンキン、ボンボンは地名だとの事で、面白い地名もあるものだと思つた。東海岸マグナガ付近の村落の名称である。

マグナガは、大城孝蔵氏最後の事業地で、ラヒリバー・プランテーションの所在地であるので、私は、

どうでも一度は行かねばならないところであつた。

仲間滋夫君は、私がラサンに居た時からの知友で、又、最後まで郷党の先輩大城氏の事業に従事して居たのである。その縁故で、私は、ダバオからランチに乗つてマグナガに行き、仲間君のキャンプに一週間もごろくして居ながら、付近の耕地を歩き廻つたのである。

二 ダバオ東海岸では、寶多産拓殖会社、サザンクロス拓殖会社、ラヒリバー拓殖会社の三邦人会社と、パントウカン、マンピシン、タ克蘭ガ等の三四の比人、米人耕地を見て歩いたのである。

三 タグナナンの耕地はモーロー・プランテーションと称し、米人アーラン夫人の経営である。日本人が百三十五人中百三十人は沖繩人、前のジャコブソン氏の耕地と共に、此辺は殆んど沖繩県人が多く、そして米人等に信用せられて居る。

四 バントーカンは、土地のキャンセル問題最初の槍玉に挙げられたゴルフ・プランテーション・コムパニーの所在地である。米人H・B・ヒューズ氏の経営で、全面積五百町歩、日本人自営者四十人程で、殆ど全部が沖繩県人の入耕地である。

石垣は、そのように精力的に、沖繩人のいる耕地を訪ね廻つて居る。そして時に、耕地で働いているものを前にして「二場の講演」をしたりしてもいた。

五 マグナガに到着した翌日、金武字会があると云ふので招かれて一場の演説をして、青年の士気を鼓舞した。会衆二百人余、余興に相撲があつたが、どしやぶりに大雨が長い間降つた。しかし彼等は、雨の中のものともせず、泥まみれになりながら勇ましく日没まで力闘したのであつた。

六 マンピシン其他の耕地に働いて居る邦人麻耕作所の集会所三ヶ所に於て、一場の講演をなした。

石垣は、「ダバオ特集号」に「キンキン・ボンボン記」「ラサン河畔の思ひ出」「バゴボー人のアゴン」の三編を寄せている。一から六までの引用は、その中の一編「キンキンボンボン記」(目次では「キンキン・ボンボン記」となっている——引用者注)に見られるものである。

マグナガは大城孝蔵の「最後の事業地」であつたことからして、「金武字会」がそこにあつたのも別に不思議なことではない。石垣は、そこで「二場の演説をして、青年の士気を鼓舞した」というが、どのような演説をしたのであろうか。またマンピシン其他の耕地でも「二場の講演」をしたというが、どのような講演をしたのだらうか。

石垣が、金武字会の青年たちを前にして、どういふ演説をしたのかは明らかでない。ただ時期を同じくしていると思われる演説の記録が石垣のあと一つの紀行文「バゴボー人のアゴン」に見られる。一九三六年六月の末、ダバオ州サンタクルース、バラカータン耕地の酋長オウエン宅で石垣は「酋長オウエンを始め満場のバゴボ人諸君!私は日本から来た新聞記者であります。私は、今日諸君の村落に来て盛んな歓迎会を受けて有り難く厚く感謝する次第であります」と挨拶し、「私が、当地に参りました目的は、私の同胞の多数が諸君の所有する土地内に入つて来て、麻の耕作をなして生活をして居る実状と、諸君の風俗習慣を見せて貰ひに参つたのであります。しかし、私は諸君の風俗習慣を珍しがつてわざと見に参つたのでは無いのであります。／＼私の同胞が、諸君と共に手を引き合つて、産業を興し、御互に共存共栄の道を講じ、有無相通じて、従来も互いにやつて来た通り、将来も幾久しく仲良くやつて行く」と云ふ為めには、吾々は充分諸君の事情を知つて居らねばならない。又諸君にも出来得る限り、吾々の事や、日本の事情を知つて居て貰はねばならないので、必要止むを得ずやつて来たのであります」と始まる演説をしていた。

石垣は、そこで日本人が当地に入つてきたのは、土地を奪うとか、利益の搾取を目的としてのことではないこと、

それどころかこの三〇年間、さまざまな迫害を受けながらも比律賓の為に一途に働いてきたこと、未開の地であったミンダナオ島が、新たな産業の地として世界注視的になったのは日本人のおかげであること、それにも関わらず今土地法違反といったことで騒ぎ立てるのは諒解に苦しむとしながら、将来は、共に手を取り合つてミンダナオの開拓に邁進しようではないかと呼びかけていた。石垣の演説に対し、スペイン時代には圧迫され、アメリカ力時代には稍よくなつたとはいえまだ恵まれなかつたが、日本人が入つてきてから、土地を耕作してくれ、プレゼントを呉れるので、勞せず所得を得ると云つた有り難い時代になつたとして、永久に日本人と提携して行きたいと酋長オウエンは応答したと書いていた。

石垣の演説は、日本人の開墾のおかげでミンダナオ島が「新たな産業の地として世界注視的になつた」ことを強調したものであつたが、金武字会の青年たちを前にして行つた演説は、このバラカータ耕地でのバゴボ人向け演説を日本人向けに焼き直してやつたのではないかと思える。石垣は、「元來、私といふ人間は講演とかをする柄でないし、極めて下手で、脱線転落等が得意のぼろ講演で、自分で何を云ふか分らない位であるが」といい、「邦人耕地に於ては、日本のニュースに飢えて居るので、何でも喋ろと云ふので、私は勇気を出して喋り歩いたのである」といつてゐるが、オウエン宅での演説を見る限り、「脱線転落」どころか、首尾一貫、すぐれた「演説」家の才能を有してゐたことがわかるし、青年達を鼓舞する講演をしたにちがいない。

石垣は「キンキンボンボン記」の中で、「バンガシナンでは、アラナシオ君が、私に向つて、恰も昨日でも訣れた人のやうに、何故此頃大力商会はうつちやらかして居るかと思ふので驚いた。私は、十八年も昔の事であるから全然忘却してしまつてゐたのであるが、彼は、私がダバオにゐた時の事をよく覚えてゐたのである」と書いていた。また「ラサン河畔の今昔」の中で「昭和十年の末、私が南洋群島の島々を廻つて、ダバオに上陸した時」と記して

いた。それらの記述は、仲原善徳の「僕とダバオ」に見られる一節「僕は、大正六年七月ダバオに渡航し、ローヤンの座安亀助君のところにて二ヶ月草取労働をなし、後ラサン拓殖会社に三年程勤務。ラサン食堂、大力商会等を創設し、大正九年新嘉坡に渡航した。麻山も経営したが大損をした。昭和十年十八年ぶりで再渡航し六ヶ月滞在して帰朝した」と、大きく重なっている。石垣の紀行と仲原の回想との類似は、歴然としている。同一の人の手になるものである。石垣兼治は、仲原善徳のペンネームの一つであったといつて間違いないはずである。

「ダバオ特集号」には、無記名記事が数多く見られる。無記名記事は「南洋情報」記者仲原善徳が担当したに違いない。例えば「神山鴻吉氏はモロの部落に入り、各々土人を心服せしめて開拓の草創時代に奮闘し、後人の為めに大なる功績を遺した」、「勢理客と上原の二人は、東海岸ラサン方面に於て最も危険なる畜地に単身入り込んで煎餅焼きより漸次手を述べ日曜雜貨品を商ふまでになつたが、二人とも後郷里に帰つて行つた。後ラサンに神山鴻吉が入つて行つて、酋長サムエルの勢力と争ひながら、煎餅焼きより身を立て、真栄平房仁と共にラサン拓殖会社を創立して此方面に於ける邦人移住の基を開き、ブナワンには赤嶺亀次郎が又土地を租借して栽培会社を組織して邦人の為めに便利を図つたのである、神山、赤嶺の二者は相次いで死去したが、此方面の開拓者としての名はいつ迄も忘却せられるものではない」といつた「草分時代のダバオ」の記述や、「旧友真栄平君が、土人監督をなし、平良、宮里、長嶺等の旧友が皆その仕事に従事し、又、河口より県道までの間は亡友神山鴻吉君の遺族の所有になつてゐる椰子山とその住宅がある」といつた「ダバオの林業を視る」にあるようないわゆる現地報告は、仲原でなければ書けなかつたであらう。また「南洋地方の至る処に多数の沖繩県人が存在する。歴史的及び地理的関係の然らしむる処であつて、日本の南進政策はこの県人が常に先駆者となつて居り、恐らく将来も沖繩県人を重視せずにはいかなる事業も振はないであらう。／沖繩県人は氣候風土の関係から、恐らく朝鮮満州に於てはさしたる役に立

ち得ないであらうが、南方暑熱の地方に於ては理想的の県民である」といった、沖繩人は「南進」の先導者として理想的な存在であるという主張も、仲原のものであった。石垣は、仲原のペンネームであったことがわかれば、石垣が、ダバオの耕地に働く青年たちを前にして行つた「演説」や「講演」がいかなるものであつたか推測するに難くはないであらう。

仲原善徳は、石垣桑治のペンネームで紀行文を書くとともに、数多くの無記名記事も書いていたばかりか、『南洋情報』への寄稿を依頼する仕事もしていた。

大宜味朝徳は「第二世教育の一考察」を同誌に寄せている。海外の同胞子弟の教育が、多く小学校段階で終わることからして、小学校教育の充実をはかるべきであるとする提案をした大宜味のエッセーは、仲原からの依頼で書かれていた。同じく真栄城信昌の「サイパンの回顧」も仲原からの依頼によって書かれたものであらう。一九二〇年代後半から三十年代前半にかけて起こつたサイパンにおける運動、「運動といふのは、云ふまでもない会社に対して労働者の待遇改善を要求する運動」に関わつたことを回顧した文章は、「ダバオ特集号」の中では場違いの観を抱かせるものであるが、サイパンの問題は、ダバオの問題としていつ起こつてもおかしくないものであつたであらうし、それは「沖繩問題」といえるものでもあつたはずである。

大宜味は海外研究所長、真栄城は南洋通信社ダバオ支局長といつたように、南洋と関わりの深い要職にあつたことで、仲原は、寄稿を依頼したということもあらうが、それよりも、彼等に、南洋に於ける沖繩人のことを積極的に書いて欲しいということがあつたのではなからうか。真栄城は、それによく答えたといえるはずである。

『南洋情報』ダバオ特集号は、云うまでもなくダバオの全てを取り上げて論じようとしたものである。それは「ダバオに於ける日本人圧迫の諸問題」として取り上げられている事項、一 土地問題、二 漁業問題、三 森林伐採権問題、四 U・P問題、五 ビヤホール問題、六 従業員問題、七 ランチライセンス問題といった政治、経済、社会問題に関する日比摩擦の解決策を探ることと、「南進」政策をいかに展開するかといった課題を軸にして編集されたといつていい。しかし、そこで際だつたのはダバオにおける「邦人発展史」とでもいつていいもので、その中でもとりわけ沖縄人の活躍に焦点を当てたのが多く見られた。それは多分仲原善徳が編集したということと関係していようし、何よりも、『南洋情報』の広告が、その大半を沖縄関係者からとつていたということがあろう。ダバオには、それほど多くの沖縄人がいたということでもある。

『ダバオ特集号』に次いで刊行された「マニラ特集号」は、「比島の維新時代」と題した巻頭言で始めている。

尊皇攘夷か開国佐幕か、比律賓の今日は將にわが國の徳川末期の如き國論の混乱状態である。親米排日か、

米國依存半独立か、完全独立親米親日八方美人主義乎。混沌としてその國是を捕捉する事は困難であるが、日米両強の中間に介在してゐる新独立國の爲政治家として、その帰結点を定むるに躊躇逡巡するは蓋し止むを得ざる事であらう。

連邦議會第一次の開會に際し、提出された夥しき排外法案を点検するに、その親米又は米國依存の旧觀念は、當分のうち拭去する事の困難たるを容易に知る事が出来る。あらゆる權益を、米國の市民は比律賓の市民と同様に享受することが出来るが、東洋人特に日本人の爲めに開放取得されむとする用意は微塵だも見出す事は出

来ない。尤も、比律賓憲法とその精神が既に比律賓共和国の成立迄は、米国の一連邦としての過度的存在として制定されて居るのみであるが、それにしても、日本と日本人は余りに無視され敬遠されんとする感あるは痛恨事である。

日比關係は、吾人の度々唱導する如く、西比と米比の交渉よりも遙かに歴史的に深く、地理的にも近接し、将来永遠に相結んで進むべき運命にある事は、誰人も否認し得ざる事実である。この事実の前に、比律賓の政治家又は民間指導者等の対日態度の歪曲を如何にして是正す可き乎。吾人比律賓關係者の真剣に考慮せざる可からざる宿題である。

一九三五年（昭和十年）十一月十五日、比律賓コモンウェルス新政府が誕生。十年後の独立に向けて、さまざまな法案の整備が始まるとともに土地問題を始め、漁業問題、森林伐採権問題、小売営業権問題、従業者制限問題等様々な日比間における課題が持ち上がった。巻頭言は、比の親米、排日的態度を憤つたものであつた。

巻頭言の「あらゆる權益を、米国の市民は比律賓の市民と同様に享受することが出来るが、東洋人特に日本人の爲めに開放取得されむとする用意は微塵だも見出す事は出来ない」ばかりか、「日本と日本人は余りに無視され敬遠されんとする」といつた慨嘆は、比律賓關係者に共通するものであつたといえよう。木原次太郎（在マニラ副領事）は「日比提携の要素」で、そのような排日、恐日的態度は「比律賓人が日本及日本人なるものを充分理解してゐない事に基因する」といい、「比律賓人の啓蒙こそ經濟的にせよ文化的にせよ日比提携の実を挙げべき根本要素」だと説いていたが、では、逆に日本人は、どれだけ比律賓人を理解していたらうか。

「比律賓に対する諸家の感想」として「比律賓及び比律賓人に就て特に興味を感じたる点」についての感想を求めた企画は、日本人の比律賓、比律賓人觀をよく示すものであつた。そこで、当時南洋通として数多くの南洋紀行を

書いていた安藤盛は、「比律賓人に就いての興味との仰せ。私は彼等フィリッピン人がいやにアメリカかぶれして、一つばしの独立国人のやうな顔をしてゐるのを見ると本当に笑ひたい気持ちにつままれるのでした。今後あの浮薄なフィリッピン人がどんな風になるかが大きな？でせう。だがフィリッピン人と云つても私の云ふのは蛮人のことになしに都会に住むいふところのインテリ級です。かくさずに云ふと日本人を小馬鹿にしてゐる態度は怒られもしないではありませんか」と述べていた。また海外興業株式会社重役の肩書きを持つ正木吉右衛門は「一、比律賓人は其の指導宜しきを得ば東洋に於て日本人に次ぐ位の文明を持ち得る国民にはなれる可能性があるから同国の指導階級の人々に其の重責を自覚するやう警告したい。二、全島の未墾地の開拓を現在の比律賓人に任せて置いたら早くとも五百年はかかる。斯んな事では、世界の物質文明の落伍者となるより外ない。政治的独立を契機に経済的独立にももつとく覚醒せねば何百年経つても三等国民の域を脱し得まい。三、××の傀儡的軍備にのみ熟を上げてゐる様では未だく國家百年の大計を論ずるに足らない者だと言ひ度い」と述べていた。

安藤、正木といったそれぞれに文化界、経済界を代表するばかりか、海外通としてその名を知られていた者の言であるが、そこには比律賓人を理解しようとする態度は全く見られない。それどころか、そこにあるのは比律賓人を「小馬鹿にしてゐる態度」であり、指導者意識まるだしの姿勢である。

その中で沖繩出身で衆議院議員であつた漢那憲和の言は異彩を放つていた。漢那は「御指定の題意には副はぬかも知れませぬが左に所感を」として、「近頃日本の南進政策が宣伝せらるゝ結果關係外国に相当の衝撃を与へて居るやうであります。これは唱へ出した方に於てその時機方法に周到なる注意を欠いた点もありますが又聞く方が侵略主義と誤解した為かと存じます。我南進政策は全然平和的経済的發展を企図するものであつて毫も侵略の意図を包蔵するものでないことを列国が知つて貰ひ度いのであります。／＼比律賓に於ける日本人の發展も全然平和的経済

的のものでありまして比島の富源を開発し日比共存共栄の具現化以外の何ものでもありません。漢那の証明して居ると存じます何卒この点を比島の識者が能く認識せられんことを希望いたします」と述べていた。漢那のそれは、日本の「南進政策」への理解を求めるもので、安藤や正木の傲慢不遜の態度とは明らかに異なるものであり、漢那自身が、「我南進政策は全然平和的経済的發展を企図するものであつて毫も侵略の意圖を包蔵するものでないことを」信じていたところから発されたものであつたといえよう。漢那の誠実さが、最も比律賓人を裏切る言辭になつていったとはいへ、漢那に比律賓人へ寄り添おうとする姿勢があつたことは間違いない。

「ダバオ特集号」も「マニラ特集号」も、ともに「南進政策」の現状を示すことに意を用いた編集になつていたといつていいが、前者と後者の編集上の違いをあえてあげるとすれば、前者が土地（問題）、後者が漁業（問題）に力を入れた編集になつていたと言えよう。「ダバオ特集号」では「南洋経済的發展に対する意見」（拓務省囑託児島宇一）でわずかに触れていた漁業について、「マニラ特集号」では「マニラ湾の邦人漁船」をはじめ、「マニラ邦人漁業に就いて」（林商会岡崎睦五郎）、「マニラに於ける追込漁業の起源」（在マニラ城南朝雄）、「比律賓に於ける広島県人漁業發達状況」といったように四本もの記事が見られるのである。漁業はまた、沖繩人と切つても切れない南洋における大切な職業の一つであつた。

「マニラ湾の邦人漁船」は、「現在マニラ湾を根拠としてゐる漁船の総数は約百二十隻であり、従業者は広島県人と沖繩県人が主であつて、各々五百人内外。沖繩県人はサン・ミゲール付近に集中し、広島県人はトンドに集団し、トンド漁業組合の統制下にある」と、漁業従業者の集団とその活動地域についての紹介をしたあとで、「トンド漁業組合」については別項にゆずるとして、「サン・ミゲールに於ける沖繩県人漁業」について触れているが、それは次のようになつてゐる。

サン・ミゲールに於ける沖繩県人漁業は、又南洋に於ける最も勇敢なる代表的漁業者であつて、凡そ、南洋の国々島々の隅から隅まで彼等の知らざる処なしと謂はれる位で、チャート等は、彼等の航海に多くの必要具に非ず、瘴猛なる食人蟻等を恰も小蛇を踏みつぶす程にしか考へてゐない氣迫をもつてゐる。現に記者の知友にして、サン・ミゲールの漁業従事者と食人鮫と闘つて敵を征服したる経験者が四五人も存在し、なほ遠海に出漁して活動しつつある。

委任統治南洋群島のある長官が、沖繩県人漁夫を評して性格粗暴云々と粗暴なる言を吐いた事を記者は記憶してゐるが、マニラに於ける沖繩県人漁業者は、その長官以上に英西語及び土語を語り、各南洋の地理に通曉し、各自動車を所有し、時としてサンタアナ・ギャバレー等に紳士的に踊る実情を知れば、南洋長官蓋し思ひ半ばに過ぎるであらう。

漁夫は性格の荒々しいもの、且つその生活は極めて簡單質素たるは天下何処に於ても通用してゐる常識である。記者は、南洋群島の各地、メナード、ダバオ、シンガポール、イロイロ、セブ、マニラの各地に於て沖繩県人漁夫の多数に度々会見したのであるが、彼等の特異の長所は、その欠点を補ふて余りあるものである。

生半可通は往々、南洋群島等に於ける沖繩県漁夫の生活程度が、カナカ人と同様なりとして輕蔑し、非難せんとするが、憐れむ可し、何故に吾々は生活の地を求めて南洋の各地を彷徨するかの根本理由を知れば、非難者は自らの無智を恥づ可きである。

マニラに於ける沖繩県漁夫の家庭は、その妻娘が往々市場に出て販売の役目を司つてゐるのを見うける。実に驚嘆すべき事で、記者は、此の國際都市に於て、各国語を巧みにあやつり、性惡の比律賓人を驅使しつつ商売をなしつつあるその才能に敬服せざるを得なかつた。

此の氣迫あつてこそ世界に雄飛する日本人の前哨線に立ち得るのであつて、為政者や生半可通の体面論では南進などは絶対不可能事である。なほ、外目には、沖繩漁夫は極めて団結力強いと云つてゐるが、この点は些か誤りで、割合に糸満漁民は多年の海上生活の経済的慣習より、極めて個人的の考へをもち、共同又は公徳心等に無理解の点を見るは欠点とすべきであるが、近年教育普及の結果、次第にその欠点は補はれつつあり、マニラに於ける沖繩県人の示導者^{マニラ}には、非凡の才能ある士が多いのを見て、大に心強くなつたのである。

「マニラ湾に於ける追込漁業の起源」によると、一九一九年（大正八年）糸満出身者が集まり、タロモで就業、次いで東海岸のキンキン、一九二〇年（大正九年）ルソン島、一九二二年（大正十一年）イロイロに進出、そして「マニラ湾に於ける邦人二大漁業の一勢力」を形成するまでになつたとされるが、その一勢力をなす沖繩人漁民が、どのような目で見られていたかを「マニラ湾の邦人漁船」は書いていたのである。沖繩人漁業者が誤解と蔑視に曝されていることに對する悲憤がよく現れた記事は、多分仲原の手になるものであるが、それは他でもなく、彼が彼等と郷里を同じくしていたからに他ならない。

仲原が沖繩出身であることは「菅沼貞風の墓前感」で、彼自身が「南方雄飛陣の第一線たる琉球に産れ」と書いている通りである。その「南方雄飛陣の第一線」にたつている同郷の者たちが、誤解され差別されるのを「雜兵走卒の一員として南溟滄浪の間を馳駆」しつゝある者には、黙つて見逃すことが出来なかつたのである。石垣衆治のペンネームになる紀行に、沖繩人が数多く出てくるのも、彼等の頑張る姿を紹介することで、誤解の一端を解くことができると思つたからに他ならないであらう。

石垣は、「マニラ特集号」にも「南部呂宋遊記」「北部呂宋遊記」「比律賓女系図」三編を発表している。「南部呂宋遊記」「北部呂宋遊記」はともに現地で働く沖繩人たちを訪問した記録で、石垣があいかわらず精力的に各地を

歩き回っていることがわかるものとなつてゐる。後者は第六章からなつてゐるがその「イゴロット民族誌」の章では、訪問先の習俗、慣習が「琉球諸島の人間の風俗習慣等と著しく共通的なところ」が多いこと、さらには「部落部落にある幾つもあるオログは、結婚前の処女等の集会所であるが、これは日本の地方地方にもある処女倶楽部のやうなものである。琉球地方の夜業所とは全く同一目的のところであるらしい」といつたように、現地の慣習や風物が「琉球」を彷彿とさせるものがあるというかたちでの書き方がなされてゐた。また比律賓を語る際には必ず登場するといつていいベンゲットについては、「六 ベンゲット悲史」として「ベンゲット路二十一哩三五の開墾工事中、日本人の生命を失つたのが五百人。わが松の都の詩人、古屋白夢君が、バギオ現住一千の同胞は、先亡同胞五百の遺骨の上に立つと詠嘆してゐるのであるが、比島在住同胞二万は、すべて、彼等無名の先覚者の靈の上に立つてゐると云つてもいい」と書き、「先進国の国際的不徳義を後進国が模倣せんとし、排日法案の製造等に極めて熱心なる比島政治家が多いやうであるが、先づ日本移民のうち建てたる功績を時に想起して自省すべきである」と書いていた。

「比律賓女系図」は、キャバレーで働く比律賓女性から、母が再婚して出来た妹たちは日本人の子供だから日本人だといふ話を聞いたことや、ピヤホールで働くどこから見ても日本人に見えるピサヤ少女を見ての感想を書いたものであるが、「凡そ、比律賓人とは何ぞや、十代から二十代の前には、きつと日本人の血も多分注がれてゐるに違ひない、又、これから大に注がれて行くであらうから、その精神にも、大に日本人的精神を注ぎ込んで行かうと云ふのが私の大計画である」と結んでゐた。

石垣には「日比国際児の教育方針の根本を樹立する為」にはどうすればいいかという問題意識があつた。そこで彼は「日本人的精神」の注入という計画を打ち出しているわけだが、それは彼が「比律賓人の精神や言語は、終に

日本化するのが究極の運命ではないか」と考えていたところから出て来たものである。

石垣は「私のすばらしい夢想」として、「比律賓人に日本の教育を授ける、東洋人的精神を吹き込む」ということを語つてもいた。それが植民地主義的であり、帝国主義的な考え方に基づくものであることは多言を要しないであろうが、それは、彼が非難してやまない沖繩人を蔑視する人々と立脚地を丁度同じくしていることに気が付かなかつたのであろうか。沖繩人蔑視を憤ることと、比律賓人に「日本人的精神」を注ぎ込むといったことは、両立しがたいはずのものであるが、「南進」翼賛は、それをいとも簡単に飛び越えさせるものであつたのである。

『南洋情報』マニラ特集号は、俳句欄を設けるとともに、福田正夫の短篇小説「この一編をマニラ号に載せて、遠き赤陽下の人々に捧ぐ」を付記した「南への情熱」を掲載していた。『南洋情報』が、どれだけ購読数を持つていたかわからないが、福田が短篇を寄せるほどには知られていたのであろう。

(三)

一九三八年（昭和十三年）十一月二十五日発行『南洋情報』「台湾・英領ボルネオ・比律賓特集号」は、仲原善徳記名になる「特集号発行に就て」を巻頭においた編集になつている。仲原はそこで、本特集号は「昭和十二年四月より同十三年二月に至る約十一ヶ月間の旅行記録を収録」したものであるといい、「ダバオ特集号」「マニラ特集号」同様「前人未踏の地を探り、或はかつて発見されなかつた特殊材料に注意して案配したので、各種の南洋事情を知る上に絶好の参考書」になるはずであるとした上で、「今回は旅行中偶々事変に際会し、各地の情勢が目まぐるしく変転して居るので、時事問題に関しては本特集号には掲載しない事にした」と書いている。

「事変」とは言うまでもなく、一九三七年（昭和十二）七月七日夜、蘆溝橋で日本軍、中國軍の衝突によって始まった日中戦争のことであるが、仲原の旅行は、事変勃発から八月八日北京入城、十一月十一日上海占領、十二月十三日南京占領、翌三十八年一月十日青島占領といったように日本軍が破竹の勢いで進軍していた時機と重なっていた。「台湾、英領ボルネオ、比律賓特集号」は、時事問題に関しては掲載しないと断っているように、正面から戦争について触れた記事は見当たらないが、全くその影がないわけではない。「祝漢口陥落」として「警視庁の窓から電車の窓から行列から万歳万歳揺れる提灯」「陸軍省前の看板「東洋義道の再建へ」それに万歳これに万歳」といった新入編集者前澤末磨の歌らしきものが見られたし、石垣桑治（目次は仲原善徳記名になっている——引用者注）の「呂宋北部の再遊」には、バギオへ向かう途中偶然同乗した者たちから聞いた話として「先づ、日支事変惹起以來、米人英人等経営の会社に於て、日本大工の使用禁じたもの多く、大工の失業者が多くなつた事、比島政府に關係の仕事に勤務の給料取又は請負業者の解雇、中部呂宋の人口最も稠密なる地方に於ける大地主と小作人の争議多く、近頃血腥い話が多くなつた事、タルラツク村近の大平原は寺院の僧侶の所有地が多く此方面に争議が甚だ多い」といったことが記されていたし、渡辺薫の「新開港場アパリ」にも「一九三七年二月開港以來比較的順調な収入状態に在つたアパリ―税関も、日支事変突発するや船腹の払底と材木の輸入制限で、日本は殆ど同地への連絡を失ひ、筆者訪問の際の如きは辛うじて二百噸級発動船に少許の材木を積んだ丈けだ」とこぼして居つた」といった話が書かれていて、事変の影響が濃くなりつつあつたことが窺われるものになつてゐる。

日中戦争の勃発によつて、移民地の英米關係職場では日本人に対する厳しい対応が見られるようになっていたが、雑誌の編集には大きな変化は見られなかつた。記者は相変わらず、移住地を飛び回つてゐるし、しかもそれがさらに広がつてゐた。石垣桑治の「英領ボルネオ遊記」、記者の「台湾の印象」「台湾雜景」といったのがそうだが、戦

時とは思えないような旅、取材旅行を続けているのである。

しかし、その旅、取材旅行の記録は、これまでと少々異なるものになっている。

私の敬服してゐる新聞記者の某君は、台湾は一種の特別村即ち内地の片田舎の村、台湾村と思へば好いと私に教へて呉れた。なる程、台湾と云ふ土地は、一種特別な村落だわいとつくづく感心せざるを得なかつた。

会社の社長等と云ふ階級に面会するには、東京で大臣に会見するよりも困難な手順を経なければならぬ。

最も、台湾では、重要な人々に面会するには一々総督府の紹介を持つて行かねば会わない慣習になつてゐる。

これは構はないとして、社長は又山の上人の超層階級として吾々下賤なものに御目通り叶はん事は構はないとして、カフエーや料理家許り廻るのを日常の仕事としてゐる庶務課長とか云ふ人々に一々貴重な紹介状を持つて行くと云ふ事は、吾々自身の自尊心を傷けるのみか紹介者の人格を迄失墜すると思ひ、たまらなく不愉快なものであつた。

私は、ある銅山に関する用件をもつて遠いく山の上に、ある相当な人の紹介（状）を持つてわざわざ一日の隙を費して庶務課長殿を訪問して行つた。

然るにその庶務課長は、理由なしに面会を避け、私は比律賓に四十何ヶ所の有望鉱山を所有してゐる由なる庶務課次長殿に接見する光栄しか有し得なかつた。内地等では考へ及ばざる礼儀作法である。

ある紙会社では、予め電話で打ち合せてあつたので炎天の下をわざわざ徒歩で行つて——乗物は何も無い処であるから——名刺を庶務課長に出したら、私はこんな人は知らんとこゝでも庶務課次長君に引見された。無論、此等の徒から何の話も、材料も得られるものではなかつた。

台湾では、比律賓とりわけ奥地に於ける日本人記者を遇する態度とは比較にならないものがあつたのである。よ

くも悪しくも台湾は、日本的な職階制度が浸透していただけでなく、それが極端に踏襲された植民地であった。比律賓では歓迎された会社訪問が、台湾ではけんもほろろに扱われたのである。取材記者としては、これほど腹に据えかねるものはなかつたであらう。それだけではない。

台湾では新聞雑誌が、おそろしく悪用されてゐるやうに思ふた。私の知つてゐる「沖縄県久米島」に就いてその頃度々記事が出てくるのであつた。同島の金鉱が有望であるとの記事で流行の話題になつて居たのであるが、それをわざと「鹿児島県下の久見島」として書いたり「沖縄県下の無人島恐る可きマラリヤの流行とハブのウジャクしてゐる処」などと書いて、誰人もそれを訂正しやうとする奇策(マヤ)な良心をもつてゐる地理学者も、小学校の先生も居ないやうであつた。

若し天気晴朗の日、基隆から首を長く伸ばせば眼下に見えそうな近距離にある沖縄県下でも有名な島の事である。それが、基隆の鉱山ブローカーの手に乗つて、無人島になつたりハブの充満する島になつたりしてゐる。恐る可き無智と無恥である。

私は、自分の生れ故郷の名譽の爲めに「その島は沖縄県下の久米島であつて、人口一万五千。中央公論や改造等の一流雑誌でも、おそらく台湾全島より多く読まれて居るだらう処の文化の島だ」と訂正した。

「台湾の印象」は、無記名になるものだが、仲原善徳が書いたものであることは、「自分の生れ故郷の名譽の爲めに」とあるところからわかる。仲原は、台湾でよほど嫌な思いをしたのであらう。これも多分仲原が書いたのであるが、「台湾雑景」では「台湾の民間人の馬鹿くしい低劣愚悪の氣風は、到底二度と私に台湾を踏むの勇氣を出させ得ないまで輕蔑すべきものであると思ふた」とまで書いていた。仲原にそのような思いを抱かせたのは、勿論、台湾に於ける日本人の階層意識の愚劣さにあつたといえようが、あと一つ、台湾人の沖縄観にもあつたかと思える。

言語の事で滑稽なのは、台湾人が、お隣りの琉球では、依然琉球語を使用してゐるではないかと云ふものがある。台湾の官吏は在台沖繩県人に対し、君等からしてけしからん、早く普通語を使へと云つた事である。これは、此台湾籍民も、官吏も共に琉球語が日本語の古語であるの知らなかつた結果である。台湾語と琉球語と同じく、日本語と全然無縁のものであるとされては琉球語が泣くであらう。

言語に限らず、台湾の官吏や新聞記者が常に琉球を継子扱ひにしようとするのは、彼等が無智の結果であり、台湾人が琉球の欠点を指摘し抱合心中をしようとしたりするのは、悪い慣習である。

又、台湾人が、総督府に圧迫されて、不平を云ふ分子もある由であるが、上述の如く、台湾の百姓は天恵豊なる上に、政治的にも寧ろ甘やかされて居る程である。日本内地の農家の実状を知つたならば、不平など云はれた義理ではないと私は思ふた。お隣の琉球から見れば、誠に台湾こそは、王道楽土であると考へた。

仲原は、台湾にいる官吏や新聞記者が沖繩を見下すような言動にも、さらには台湾人の連帯しようとする在り方にも違和感を覚えるだけでない。彼等は、無知だと告発するのである。仲原には、台湾の全てが気に入らなかつた。不潔、現金主義、偽札、偽金、物価高、不親切、横柄、これは何も台湾だけに見られるものではなかつたはずであるが、仲原は、よほど腹にすえかねていたのである。

仲原もそのことに気が付かなかつたわけではない。「台湾をこきおろして許り居て、台湾のいい処を見逃しては濟まない」として、台湾出身者との親しい交流について触れていた。比律賓や新嘉坡で付き合つていた彼らは「個人的に交際して、実に人情の厚い、親しむべき性格を持つてゐる」こと、台湾で友人に紹介された彼らも「個人個人として交ると、まことに情味の深い人々であつた」といい、仲原はバランスを取らうとしているが、何か馴染み難いものがある感じを抱いたのではなからうか。

仲原は、青年たちに台湾芸妓の家やカフェーに案内されたこと、さらには豚祭り等に招待されたことを述べた後で『改造』の懸賞小説に一等当選した劉君リウとも特に一夜会見して見た」としてその印象を書いている。劉君は「極めて神経質な、いかにも芸術家らしい青年であつたが、一面歯痒い程内気な、臆病で、弱い性格の青年のやうに思つた。何を遠慮してゐるか知れないが、犯罪者が警官の前に立たされてゐる気持ちで、決して本心を見せまいと努力してゐるやうに見えた。私には彼劉君が、私を（数字空白）の思想的探偵とでも誤解して居るのでないかと思つて気の毒であつた。最も私は警察会館に泊つて居たから、それ程彼はいぢけていた」というように書いてゐる。

龍瑛宗の「パイヤのある街」が『改造』に掲載されたのは一九三七年四月、第一九卷第四号。『改造』第九回懸賞小説賞を受賞したことで一躍その名を知られるようになるが、「その頃、台湾の新聞の文芸欄は、彼の作『パイヤのある風景』に就いて、批評が盛んで、甲是乙駁なかなか賑やかであつた。しかし、それ等の文学青年諸君の議論は、どうも何れも嫉妬的、又は弁護的の喧嘩であつて『パイヤのある風景』の芸術価値を論議して居るのではなかつた。『作者を虐める風景』又は『作者を庇ふ風景』であつた」と、仲原はいささか揶揄気味に書いてゐる。

一九三四年（昭和九年）十月、楊逵が「新聞配達夫」で、『文学評論』懸賞小説に入選したことが「次々と日本文壇を目指す台湾人作家を輩出させる引き金にもなった。呂赫若、張文環、翁鬧、龍瑛宗らがそれである」（『日本統治期台湾文学台湾人作家作品集第一巻楊逵』「楊逵作品解説」河原功）といわれるが、楊逵に続く龍瑛宗の受賞は、一段と台湾文学界を活気づかせるものとなつたはずであり、仲原の渡台は、丁度その頃にあつていよう。

仲原は、龍瑛宗の「パイヤのある街」を読んだであろうか。向学心に燃える青年の失意を描いた作品の中に描

き出されている台湾の姿を。龍はそこで「吾々下つ端に対しては大へん威張り散らしてゐるが上役や内地人に向ふと、打つて變つて慙慙で家畜のやうに卑屈」になるあり方や、「同僚・友達から聞かれる言葉は凡べて人の噂さだとか女や金銭に關することばかりであつた。彼等は現狀に甘んじ、現狀に転がつてゐる僅かばかりの享樂を血眼になつて探し求めては楽しんでゐる」といつたあたり方を取り上げ、「吝嗇、無教養、低俗の汚い集團こそ彼の同族ではなかつたか。僅か一錢のことでも口汚く罵り、唾み合ひをしなければならぬ纏足の婆たち、平生は鏝一文でもしみつたれなのに冠婚葬祭になると借金までして仰山なドンチャン騒ぎをしたり、詐欺が多く訴訟を好む人たちが狡猾な商人、中学校を出、新知識階級と謂はれる陳有三の眼に映るこれらの人々は、向上發達もない暗い生活面に蔓延る卑屈な醜草のやうにみえた」と書いていた。作品に記されたそのような主人公の感慨を讀んでいたとすれば、もう少し、龍瑛宗に対する対し方も作品をめぐる議論に対する対し方も變つたのではないかと思ふ。

日本語を習得し、日本語の小説を書き、ある程度の水準に達した作家たちが何名も居た台湾、そのような作家たちが何を嘆き、何に懊惱し、何を訴えようとしていたか、沖繩の歴史に目を向けたことがあるものなら、そこに取り上げられたものが決して他人事ではないものとして感じ取られたはずであり、そのような事を書いてゐる作家を、「犯罪者が警官の前に立たされてゐる気持ちで、決して本心を見せまいと努力してゐるやうに見えた」といつて一蹴することなどできなかつたはずである。

仲原には、植民地の問題がよく見えてなかつたといわれても仕方のないことである。台湾は、比律賓と大きく異なるものがあつたのである。

「台湾・英領ボルネオ・比律賓特集号」は、マニラ特集号、ダバオ特集号で扱えなかつた比律賓を取り上げるために組まれた特集号に見えないこともない。それほど比律賓に關する記事の占める比重が大きいといつていいもの

であつた。

昭和十二年のダバオ訪問は、同七月十日より、十一月十日に至る全四ヶ月であつた。この間に、私は、故人大城孝蔵氏生前の功勞を記念する為めの、ダバオ沖繩県人会発起の胸像建設の相談に預り、諸方かけ廻つて寄付金を募集して歩いた事と、同氏の小伝を書く事を委嘱されたので、其材料を蒐集することに主力を注いだ。

その序に、或は余暇を利用して、最も尖端の耕地をかけ廻つて、ダバオ州の住民たるアタ、バゴボ、マンサカ、マンダヤ、マノボ、モロ、テロライ等の事情を調べて歩いた。ラサン河の上流、イホ河、ダバオ河の上流等にて、彼等と日本人との生活の交渉を、出来得る限り精細に調査して見た。

「台湾・英領ボルネオ・比律賓特集号」に収録された比律賓関係記事及び紀行等は、いつてみれば「大城孝蔵伝」を書くための副産物であつたといつていいが、仲原の旅は大城の足跡のない所まで及んでいた。「熾烈なる探求心、飽くなき知識欲——これこそ冒険旅行者の生命を駆り立てる熱火であらう。多くの旅行者は、旅費や時日に恵れ結局幾分の遊山気分の裡に遂げられるを常とするが、本社長長の旅行は殆んど無銭旅行者の如く困苦欠乏を嘗め、しかも最も煩雜な仕事に携はりながら、あらゆる角度の視察を遂行する。此の点偉大なる旅行者、驚嘆す可き探検家と謂ふも敢て過言ではあるまい。誰がよく是れ程に深く比律賓を、否南洋を旅行したものがあらうか。洩れなく、そして巨細に見、紹介したものがあらうか」と「後記」で前澤末磨は書いているが、仲原の旅行、とりわけ比律賓の奥地行は確かに眼を見張らせるものがあつた。一体何が、仲原をそこまで駆り立てたのであらうか。

その一つは最初の特集号である「ダバオ特集」の巻頭を飾つた「南進論とダバオ」に見られるであらう。彼はそこで「南進論の聲華やかなる近來の如きは前古未曾有である。過去の歴史を顧みて種々の主張をするまでもなく、日本の地理を熟視して立論するまでもなく、日本の内情は、今や將に南進を實行せざる可からざる時機に到着した

やうである。言句の時代を経過して、行動の時が来たやうである」と歌い上げていたことから明らかにならう。「南進」政策の実行者になることを志したことに依つていよう。そして彼が他でもなく南洋を目指したのは「台湾・英領ボルネオ・比律賓特集号」の巻頭を飾つた「南洋に於ける移殖民政策に就いて」の中で「今わが国は北支滿州に多数の移民をなしつゝあるが、しかも尚力余りてか遠く南米の地にさへ大に移民を奨励しつゝある。而して南米の如きは貿易上何等得る処なきのみか、国防上に於ても益なき遠き世界である。反之南洋移民は貿易を繁栄に導き、國威を發揚し、相互の理解を深くし得る等多くの利益あり、その積極的奨励策を把る可きは今更論ずる迄もない」といつた考えによつていたし、「彼林内閣当時声明されたる南進政策の爲めに、却つて門戸閉鎖される結果となつたからと云つて、絶対沈黙を守る可しとするは必ずしも當を得てゐる議論とは云ひ難い。それは、日本が侵略主義國、好戦國民、植民地占領の意圖あり等と誤解された結果であつて、この誤解を釈（マ）き、經濟的提携の爲めの堂々たる立言を爲す政治家——ヒットラー的政治家出現すれば、門戸は大に開放される事必定である」といつた信念から出た。

仲原が、南洋を跋渉した理由は、政府の「南進」策に業を煮やした以外にもあるがそれだけではない。あと一つは石垣泰治記名になる「英領北ボルネオ遊記」で、「今、シャミール島には四百五十人の同胞在住し、漁夫は日々海上に活躍し、女工も亦男子と同じく頑丈な体格の女子のみで男子に負けじと工場に活動してゐる。／＼此の女工の中四十人は、私の郷里の出身なので仕事中をも構はず召集し、工場の庭前で私が一場の挨拶を述べ、彼女等を激励した」と書いてあるところからわかるように、南進の前線にいる「郷里の出身」者を激励したいがためでもあつた。南進への激情と、南洋にいるものたちの激励、これが仲原の車の両輪をなしていた。仲原は、ヒットラーを仰ぎ、当代の首脳貞風たらんと意欲したといつていいだろう。

(四)

「台湾・英領ボルネオ・比律賓特集号」は、その紙面のほとんど全てを仲原善徳が埋めていたが、一九三九年（昭和十四年）十一月二十五日刊行された「南洋群島特集号」も同様であろう。仲原善徳記名になる「南洋群島の新地位」「南洋群島再遊記」「南洋群島と沖繩の關係」三本に仲原生記名で「ソーンソール島」、一記者記名になる「南洋庁熱帯産業研究所を觀る」、そして石垣桑治記名の「恋のない國の話」「琉球の舞妓」二本の他は「早わかり南洋群島」「植民地鳳梨經濟」「南洋群島の産業」「南洋群島の貿易」等すべて無記名になっているが、一記者は勿論のこと、無記名記事も仲原が書いたに違いない。

仲原は、相変わらず南進の必要性を説くのに懸命であったといつていい。しかし、それは必ずしも三六年そして三八年段階のそれと同じであったとは言いがたい。仲原は「南洋群島の新地位」で、従前通り「南方政策又は南進政策なるものは、南方諸國の領土を侵略するものに非ず、經濟的發展、共存共榮を計るものたる可きは勿論である」と述べているが、巻頭言の「南方政策の樹立実行期に際して」では次のように論じていた。

明治以来の先覚南進論者によつて、南方進出を叫ばれて以来、移植民、貿易栽培事業、海運、鉱業等に於て、邦人の南方進出は著しく發展飛躍を遂げた。しかしながら、それ等の事實は、単に比較的の事であるのみで、南方進出の必須的不可避的とする根本要因をなす処の人口問題の解決、國際情勢に相應して勢力を保持する爲め等の策を行ふに至る迄には前途未だ甚だ遠しとせねばならない。寧ろこれから踏み出す段階にあると謂ふのが我國の所謂南方政策の現在であらう。

無限に増加する人口を移植し、国民生活必須の資源の獲得をなす等、南方進出の意義は多角多面であり、又時代の推移と共にその意義に変化を来たす事ある可きは勿論であるが、現在の如き南方発展の緩かなる活動を視て、南方政策の具現化などと称するは當を得たものと云ひ得ない。

いつの時代に南方政策が樹立され、誰に依つてそれが敢行されたか。日清戦争の結果台湾を得、欧州戦争の結果南洋群島を得、偶然の分配に預り得たのみで、台湾を得る為めの日清戦争、南洋群島を得るための欧州戦争ではなかつた。

吾等の所望し、又国家の要求するものは狭隘なる台湾、南洋群島の如き限られたる地域のみではない。より広き地域に渉る日本民族の自由闊達なる活動範囲であり、南方政策はこの為めに樹立敢行さる可きで、吾々はそのパイロットであり、障害の除去者であり、推進者であらねばならぬ。

台湾の治績を讃え、南洋群島の現状を謳ふて南方政策の具現を誇る如きは井中の蛙の業であつて、台湾及び南洋群島は、単なる途上の一段階であり、政策は、此段階を強靱強化し、此段階の上立つて四囲を展望し、そして樹てられ敢行される可きである。

仲原の「南方政策」に関する主張は、より先鋭になりつつあつたことが窺われる巻頭言である。仲原の主張は、一九三六年段階では、漢那憲和が「我南進政策は全然平和的経済的發展を企図するものであつて、毫も侵略の意図を包蔵するものでない」と述べていたこととほぼ同位置にあつたと思われる。「南洋群島の新地位」でも、まだその言葉が見られないわけではないが、もはやそれは言葉の上だけのものであり、真意は「南方進出の意義は多角多面であり、又時代の推移と共にその意義に変化を来たす事ある可きは勿論である」といったところにあつた。

矢野暢によれば、「日本が決定的に「南進」に踏み切つたのは、昭和十五年七月二十二日に第二次近衛内閣が成

立した直後のことであつた」という。その画期をなしたのが七月二十六日閣議決定された「基本国策要項」と翌二十七日大本営政府連絡会議で決定された「世界情勢の推移に伴う時局処理要綱」の二つであるが、積極的な「南進策」の登場した背景には、従来海軍だけのものではあつた「南進論」が、ドイツの戦勝に刺激されるかたちで陸軍もこれまでの「北進論」から「南進論」に転換、南進を目指す路線へと移行していったことがあげられるという。そして、八月十五日、「日滿支をその一環とする大東亜共栄圏」という言葉が、外務省担当記者団との記者会見の席上松岡外相によつて発せられ、「大東亜共栄圏」という表現が定着していくという。

「巻頭言」は、「大東亜共栄圏」構想を先取りしたかたちのものになつていくといつていい。仲原は、「南洋群島再遊記」の中で「日本の運命は、隣邦諸国の好むと好まざるに拘はらず、南進せざる可からざるものだ。日本は人口が増加する、日本は資源が乏しい。いろいろの理由で、南方諸国に進出せざるを得ないのだ。汽船会社や事業会社が、多少国家の補助を受けて居るから、との理由で、其汽船会社や事業会社を英国政府が睨んで居るとか、和蘭政府が気にして居るとかで、先方の政府よりも寧ろ却つて大きく頭痛に病んで居る日本の役人が居るのである。しかしかやうな神経衰弱症的心配は、結局自然の法則とか、国家の運命とか、天下の形勢とか、或は、臨床的治療法とか些も研究考慮しない結果であつて馬鹿々々しい限りと云はねばならない。かやうな事を一々気に病むで居ては徳川以前の鎖国時代に返る外ないのである。何故ヒットラーは、他の独立国をも自分の領国の如く勇敢に振舞ひつつあるか。何故グンクと一つの号令だけで諸方に進出しつつあるか、ヒットラーが、他国の神経許り尊重して居たならば、終に独逸の國勢回復は不可能に帰すであらう。／＼それで私等は、日本の南進政策のかけ声はかけ声だけでも意義があると思ふ。たゞかけ声だけで実行が伴はない事が残念と思ふのみである。その意味を以て、私らは、南方進出、南方政策の実現を常に速に促しつつあるのである」と書いているように、むしろ、先導の役割を担おうと

したといつていい。

仲原は「私の信念を述べておかねばならない」として、「南方進出、南方政策の実現」をと述べていたわけであるが、その実現にあつて、彼には心にかかる問題があつた。それは、他でもなく沖繩の扱いをめぐる問題である。仲原は、「沖繩県人の南方發展は、單に客氣やイデオロギーによるものでなく、必須的生活の要求に基くものであり、日本の南方進出は又國家生存上の必須的の要求に基くものだ」といい、「然るに台湾に於ては此沖繩移民は、冷酷なる劣等扱ひを受け、南洋群島の役人中、或は視察者中、沖繩移民を惡口し、非難するを以て一種の優越を感じるものあるは甚だ不心得な人々と云はねばならない。もとより言語風俗が多少異り、教育程度の劣つて居るの遺憾とす可き事であるが、これを以て排斥し、或は差別的待遇をなさんとする等は誤れるも亦甚だしいものでかやうな思考と感情の下に於ては、南洋諸國の多數の異民族に対して、文化的に君臨する事は到底不可能と私は思ふのである。台湾の移植民事業失敗の原因は、おそらくかやうな点に基因するであらうと私は常に思ふのである」と説いていた。

沖繩移民に対する惡口、非難は、何も台湾だけに見られるものであつたわけではない。仲原が「南洋群島特集号」で、あえて「南洋群島と沖繩の關係」という一編をものしたのは、「蔗作労働によつて、沖繩県人は、南洋群島に貢獻する事大であつたが、又南洋群島に於ける漁業の今日の大をなして居るのも沖繩県人の力に負ふものが多い」といつたように沖繩人の貢獻度を誇りたいがためであつたのでもなく、また「昭和十二年末庁管内地人人口五八、九八〇人中沖繩県は三二、〇八二人を占め、約六割の比率を示して居る」といつたように移住者の多さを誇示したいがためでもなかつた。

初めて南洋群島を旅行する人は、同地に沖繩県人の甚だ多いのを見て奇異に感じ、必ず沖繩県人に就いての

感想を洩らすのが常である。其感想は、人々によつて種々相異なるのであるが、大体に於て識見豊富で経綸を論じたり、社会からも天下国家に有用であると尊敬されて居る人々は、沖繩県人の活躍を大に賞賛し、感激し、天下の情勢も、社会の機構も、国家の構成にも全然無知な人間とか、婦人は必らず悪評を下すのが常であるようだ。

南洋庁に勤務して居る官吏の中に於てさへ、同地の沖繩県人に悪評を下すものが時偶にあり、視察旅行者の案内をしながら、全然白紙の旅行者に向つて、沖繩県人の欠点を指摘してそれを教へ自ら快とする者さへ往々ある。素養のない新聞記者等が、よくそれに禍されて、帰来新聞雑誌にそれを書き立てる。かやうな新聞記者は独自の見解も、観察力もなく、地理的教育も受けず歴史的素養もなかつたと見えるので、かうした間違を冒すに至るやうに思はれるのである。

一九二五年に刊行された古田中正彦の「椰子の蔭」を初め、一九四三年石川達三の『赤虫島日誌』まで、実に多くの南洋群島紀行が刊行されるが、そこには、さまざまな沖繩人像が刻まれていた。新聞、雑誌の記事を始め、沖繩人の後進性、非文明、非文化性を書き立てた南洋紀行を仲原は目にしていたはずである。仲原は、そのことに憤激し、「偏見者の啓発」に向かつたのである。「楮て、沖繩県人に対する非難は、いかなる点であるか。事細に述べ立てるのは、愚劣の事であるとも思はれるが、偏見者を啓発し、誤解を解くために多少必要でもあると思ふ」として、まず「沖繩県人の言語と風俗が、多少異なるために意志の疎通を欠き、従つて誤解を招く事が多い。大体に於て、沖繩県人は多くの弁解をしたり、宣伝欲のない特色がある。正直な人間であればある程沈黙の聖者然としてゐる。充分説明し弁解する事も出来ないで「分らねば仕方がない」と済まして居る」と沖繩人の性格に関する記述からはじめ、南洋群島における沖繩出身肉体労働者の多くがほとんど教育を受けてない連中であることからして、彼ら

の失策や欠点を上げて沖繩を推し量るのは滑稽であると釘をさすとともに「沖繩県人は、住民の六割以上の数を占めてゐる以上、犯罪者も、貧乏なるものも、風体のよろしくないものもその数に比例して多いのは当然である筈だ」と常識的な判断の必要性を説く。次に「仮へば、何れの人もサイパンに着くと、沖繩県人は小さな家に住んで居た。カナカよりも劣等な生活をしてゐた。カナカと共に労働して居たので面目がない。と、かやうな皮相劣等な事を、一廉一見識あるやうに話したり、新聞雑誌に書いたりして居る」が、南洋群島の家屋は一般的に小さく、小さなトタン屋根に住居して居るのは何も沖繩県人だけではないと反駁するとともに、再度念を押すかのように「カナカと共に共同で仕事してゐたとか、カナカより小さな家に住んでゐたとかと、愚劣な非難をなして恥ぢない。南洋群島に移住したるもの其多くは、旅費からぐで行つて居る肉体労働者である。熱帯地の肉体労働者が労働をなすにお体裁をかまつて居て果して労働が出来るであらうか。比律賓群島に於て今日成功して居る栽培業者、貿易業者でも、当初は土人と伍して肉体労働をなした人々である」と強調し、「南洋に於ける日本人発展の歴史的変遷を知らない人々が、当初の印象を以て膠つた判断を下すから危険である。カナカと共同で生活するもの強ち沖繩県人のみでない」と論じた。

仲原は、南進を強調するとともに、沖繩人に対する偏見を払拭しようと思命であつた。仲原のそのような情念は、より強く彼の次のような体験に発していた。

近年になつて、私は南洋諸国を度々旅行するので、自然到る処に於て同郷出身者と接触する機会が頻繁となり、南洋諸国に於て故郷の複写再製を見るやうな有様であつた。又私の所謂南進主義なるものは、自然これ等の故郷出身者と結び付いて考へる事がなければ到底、何等の意義を発見し得ないのみか、いや、日本帝国の南進政策そのものが、第一に此私等の故郷出身の労働者を無視しては、その遂行が極めて困難であるとまで信じ

て居るので、結局、日本帝国の南方伸展即沖繩の進出也との結論まで生んで居る故に、尚更、故郷と謂ふもとの断ち難い因縁をつくづく感ぜざるを得ないのである。

私の思念が、かうした結論を先にしたのでなく事実が先じて私の思考にかうした結論を下して居る事は、多くの南洋諸島旅行者が肯く事が出来るであらう。

南洋旅行をしているうちに、仲原は「南方伸展即沖繩の進出」ということが自ずと体得されたというのである。それだけに、南進を強調しようとするればするほど、沖繩を説かざるを得なくなつたという事である。仲原は「故郷琉球を、否沖繩を今一度見直さねばならないと思ふやうになつた」という。「沖繩を勉強せねばならない。むづかしく云ふと、沖繩に対する認識を深めねばならないと考へた。認識などと云ふ言葉は妥当でないか知れないが、沖繩に関する理解を深くせねばならないと云ふ事になるであらう。／それは私の半身である貧しい無知と純真なる農民漁夫の故郷を弁護し、或は礼賛し、南方進出の勇敢なる移民拓土の勇気を鼓舞する上に於ても、私にとつては是非必要だからだ」という。

仲原が、これほど沖繩を積極的に語つたのはこれまででなかつたのではないか。沖繩の出身者たちを訪ねるかたちになつて来たこれまでの特集号記事にしても沖繩を語つていたといえないことはないが、それとは異なるかたちで沖繩に向き合ひだしている。仲原は、明らかに変わりつつあつたようにみえる。

私は、一面極めて沖繩的国粹主義者であるが一面極めて沖繩文化の異端者である。沖繩の舞踊に陶醉しながら、その音楽を好まない。ある場合は、その音楽に魅惑されながらその衰亡を願望して止まない。私が沖繩音楽に夢幻的に魅了されてゐる間は、阿片溺愛者が阿片による恍惚を感じてゐる瞬時と等しいものであらう。

ピアノの音に跳躍的快感を感じる時は、健康な肉体の者が春の野に舞踊してゐるに似て居る。私は、バラオ

で、沖繩の古い俳優伊良波老がなしつゝあつた一つの發明を見て驚いた。

即ち、従来の沖繩の舞踊は、各個人々の独立的舞踊が主なる型となつて居るのをこゝでは団体的に、互に調和と関連とに配意し、舞台的に大衆の観覧に叶ふ様に、或は沖繩的の狭い城塞より抜け出し、座敷より抜け出し、一層進歩的な舞台へ、一層一般的世界的の空氣の中へ、一層普遍的な世界へ、彼優の言葉を借りて云へば内地化した方向へ、旧套を脱し、古い法被を脱ぎ捨て、古い息吹を遠ざかつて行くやうで、此進歩の過程を頗る興味深く見たのである。

これは、パラオと云ふ街の、東京と沖繩即ち日本に於ける文化の中心と、文化の末端との衝突地点に於て、当初は互に相反発してゐたものが、慣習的な久しい摩擦の間に終にある融和点を見出し、一つの發明となつて音楽舞踊の混血的新現象が生じつゝあるのであつた。

だからパラオの街に於ては沖繩的特異性は多く次第に消え滅びつゝある。しかし、沖繩的特異性を全然無視する事は、その社会のいかなる処に於ても不可能である。何となればそれ程多く沖繩県人が多く、沖繩県人の開拓者としての功勞があらゆる処に刻まれて居るからだ。

仲原は「南洋群島再遊記」の中の「パラオ」の項で、右のように書いていた。パラオは、「アラフラ景氣」に湧き、「新興氣分」が横溢していた。仲原は、そこで「沖繩人の経営する料理店」に案内されるが、こちらで沖繩の三味線がなるかと思うと、あちらで内地の三味線が鳴るといふふうで、「音楽が自然的に調和の道を辿りつつある」という印象をうける。仲原の、「沖繩的国粹主義者」云々の言葉は、その後が続いているものである。

仲原のいう「沖繩的国粹主義者」とは、もはや多弁を弄するまでもないであろうが、「此琉球人が、否沖繩人が、沖繩県人が日本帝国南方コースの先々に普く分布され、その行手のパイロット的役目を負ふて活躍し、國家に多大

の寄与貢獻をなして居るに拘はらず、何故にその功績を表彰される代りに、度々非難され悪口を浴び、肩身狭く生き、時として転籍改名までも余儀なくせねばならないか」という問いを烈しく問い、その「偏見の啓発」に懸命なる者をさしていた、といつていいだろう。「南洋群島特集号」は、そのような問いに満たされていたことからしても、仲原の自己規定は、正しかったといえるであろう。

仲原は「沖繩的国粹主義者」ではあるが、「沖繩文化の異端者」であるという。舞踊はいいが音楽は好きでないという。舞踊と音楽は一体であるといつていいが、それを何故あえて「音楽を好まない」といい、「衰亡を願望して止まない」とまでいつているのだろうか。音楽を何故「阿片」のようなものだと言つのだろうか。それは一つにはその音が激しく郷愁をさそうといつたことであつたと言えようが、何よりもその音が沖繩を「徴」づけるものであつたことにあるのではなからうか。「沖繩の移住者たちの多くは郷里の島を出てから、艦船に乗つて働いたり、九州の炭坑で稼いだりした揚句、囊中ほとんど何の貯へもなしに千哩の海をわたつて南洋へ行くのであつた。稼いだ金は郷里へ送金して、自分ははげしい窮乏をものともせず、財産と言つてはただ一提の蛇味線（なま）ばかりだが、これだけはどんな時にも手放さないで、放浪の幾年を堪へて行くのだといふ。時に泡盛を飲み、蛇味線にあはせて猥雑な歌をうたふ、それだけのささやかな喜びに満足して、異郷に根強くも生きて行くのだ」といつたように「窮乏」や「猥雑」と結びついてみられがちであつたことによるのではなからうか。

仲原は、伊良波の振り付けに驚いていた。伊良波が勝れた歌劇の作者であり、名優であることは知られていたはずである。仲原が、その発明に驚いたとして語っている団体で踊られた踊りが何であつたか記されていないが、それは「南洋浜千鳥」であつたのではなからうか。何れにせよ、仲原がそこで語りたかつたことは、「内地化」であつたといつていいだろう。「沖繩的国粹主義者」が指向したものが「内地化」であつたことは、決して不思議な事で

も何でもない。仲原の中にあつたのは、他でもなく「日本帝国の膨張発展」であつた。沖繩人移民に対する悪口雜言に異議を唱え続けてきたのは、それが帝国の南進策を阻害する恐れがあるということによつていた。彼の沖繩をもっと知りたい、もっと勉強したいという思いは「貧しい無知と純真なる農民漁夫の故郷を并護し、或は礼賛し、南方進出の勇敢なる移民拓士の勇気を鼓舞する」ために必要だといふところから出ていた。

「南洋群島特集号」のあと、「南洋情報」は、特集号を組めたであろうか。仲原は「編集後記」で、「事変影響により手不足を来たし極めて不自由の間に此特別号の原稿を書き上げた。さて原稿は出来たものゝ、編集者が病気になる、印刷所はつかへて居る。紙は欠乏してゐる等と云ふ体たらくで、全く予期に反して大々的の遅刊をなした事を詫びねばならない」と書いていた。「後記」は、雑誌の刊行が思うように行かない状況になりつつあることをそれとなくしている。編集者の病氣はともかく、紙の不足といつた事態の到来は、「南洋情報」特別号の続刊を絶望的なものにしたと言つていい。

『南洋情報』は、南洋を足場にしていた。南洋の情報がその命であつた。その命ともなる情報の調査が、これまでに行なえる情勢ではなくなりつつあつたであろうことからしても、『南洋情報』の特集号は、「南洋群島特集号」で最後になつたと考えていいだろう。